

---

Round ZERO    **【ゼロとWな転生者】**    **《試験投稿中》**

HOT RIDER

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Round ZERO 【ゼロとWな転生者】 《試験投稿中》

### 【Nコード】

N9124Z

### 【作者名】

HOT RIDER

### 【あらすじ】

物語の守護者から突然言い渡された「転生」…タンクローリー爆発事故によって死んでしまった2人の仮面ライダー大好きなファンの男女、佐久弥立花と及川優梨子が転生したのは…ハルケギニア、所謂「ゼロの使い魔」の世界だった！？

## 2人の転生（ビギンズデッド）（前書き）

…これは無性にゼロ使が書きたくなった作者の無謀な挑戦物語…。  
原作は呼んでいる…が、あまりに覚えることが多いので自分うまく  
書けるか不安です。

主に原作知識の方面でアドバイスをもらえたらありがたいです。

## 2人の転生（ビギンズデッド）

英雄<sup>ヒーロー</sup>：男の子であれば大半の者は憧れ、敬い、中には嫉妬するものもいるであろうか。

弱者を大いなる巨悪から身を呈して守り通し、時には孤独に打ちひしがれ、苦悩し、痛み、その先にバッドエンドが待っているように信念を貫き通し戦う…その背中に誰もが心打たれ、時にはほろりとすることも。

仮面ライダー…このヒーローもまた心の中に生き、現代も子供達の心に勇気を与えている存在の1つ…いわゆる特撮ヒーローだ。

「異形」という仮面を被り、孤独に身をまかせながらも愛する「人達」のために戦うバイクにまたがった英雄…平成の世に入ってから、は初代から続いていた「改造人間」という要素は姿を見なくなり、「仮面ライダークウガ」、「仮面ライダーアギト」は突然もたらされた「人外なる力」を持つてしまった人間が、「仮面ライダー龍騎」や「仮面ライダー555」は「大きな力」を持った人間達の正義を貫き通す話となっている…時に「改造人間」という要素は消えるべきでなかった」という意見も聞こえるが、この平成の傾向は「大きな力がもたらす結果」というものをまざまざと見せつけられており、ある意味昭和ライダーよりも「人の中にある正義」というものを強調されているのではないか？とも思える。

…そんな「仮面ライダー」というビッグタイトルが好きで止まない男女が2人…とあるオフ会の帰りにカラオケに寄り、その後とあるショップで「仮面ライダーオーズ」に出演する怪人の「ウヴァ（さん）」のフィギュアーツを買った後に帰路についている男女…男の名は佐久弥立花<sup>さくや たちばな</sup>、女の名は及川優梨子<sup>おいかわ ゆりこ</sup>である。

この2人は2年前、どこぞの「753オフ会」というオフ会で出会い、その後親交を深めた。現在はお互いに「仮面ライダー」が好きな。今は親友である。

お互い名前に引っかけるところと、「仮面ライダー龍騎における各仮面ライダーデッキ所持者のキャラクターの相関性について」とも何とも小難しい議論で息が合い、その後はカラオケで仮面ライダーの主題歌を歌い尽くし、はたまた某レストランで「RXステーキ」を食べたり。と、オフ会仲間からもよく「恋仲」ではないことをからかわれるほど仲睦まじいのだが、彼らいわく「兄妹でいる気分」らしく、そういった恋仲にあることは想像できないという。まあ、その発言に特に冬とかには嫉妬の一言を浴びせられるのだが。

「スイッチはどれくらい集まりましたか？」

「俺は12個。でも40個つてなるとかなりきついよね。」

「そうですね。私はまだフリーターの身なんでまだ8個ぐらいしか。」

「今はしょうがないさ、やるべきことを終わらせた後にゆっくり楽しめばいい！」

サムズアップ、仮面ライダーが好きなものとしては一種の挨拶ともなっている。と立花いわく。真実であるかは定かではない。

フリーター。とはいっても、決して彼女がだらしないわけではなく、彼女は現在司法試験に向けて絶賛勉強中なので色々というがなといえる。

彼女の夢。それは「司法の面から正義を貫き通すこと」。過去に父親と一緒に見た仮面ライダー。その正義のために拳を振るう姿に幼少の気持ちはただただ感動し、いつかは生き方にも反映された。

それはここにいる彼も同じ。彼の仕事は警察官、現在は巡査として街の交番の顔となっている。

こうして「仮面ライダースピリッツ」は受け継がれていく…創始者であるあのお方も天からそんな「正義を愛する心」を見据えて笑顔でいるであらうと願いたい。

そしてその魂を持つ2人が…この直後、とある事態に直面し、そしてそこから人生を365度しっくり変えるような事態になるなど…この時誰が思っていたであろつか。

キキイーーーーー!!!

突然聞こえた甲高い…これはタイヤが道路に擦れる音だ、そしてその後続く何かが倒れたような轟音。

そして2人が轟音に気を取られ振り向いたときには…どこかで見たようなガソリンスタンドのマークが描かれているタンクローリーが…道路で横転していた。

「車が爆発するぞお　　ー！！逃げろおー！！！」

その方向から聞こえる叫び…おそらく車を運転していた運転手であろつか。

だが2人には衝撃的な光景が見えた…横転し、歩道までに出てしまったタンクローリーの巨体に…足を挟まれ、助けを請いながら涙を流している女兒がいたからだ。

周りには誰もいない…おそらく「爆発」という単語に恐れおののいて逃げ去ったのであろう。

「臆病なぐらいがちょうどいい。そのほうが長生きする」と某探偵は言っていた…だがとある青年はこうも言っていた…「やらない後悔よりやる後悔のほうがいい」と…。

立花と優梨子はその場に荷物を放置し、いつの間にか体を動かして

いた。

彼らの正義の心が「その少女を助ける」、ただそれだけのために全神経を使い彼等はそれに身を任せていた。

「蛮勇」と言われればそれまで、「無謀」と言われればそれまで…だがもしこれで自分達が死ぬ結果になろうと…もしその行動で目の前にある「命」を助けられれば後悔はない…おそらく彼等はそう思っている。

「手を伸ばさなかったら絶対に後悔する」…とある無欲な青年の言葉を中心に繰り返し、彼等は今にも漏れ出たガソリンの炎がタンクローリーの中にあるガソリンに引火しそうな中…その少女の元に辿りつき、少女を助けようと努力した。

だが何トンもある巨体、立花が素で「青春フルパワーー!!」などと叫び力を込め巨体を動かそうとするが…彼等はれっきとした人間、その巨体を動かせるはずがない。

ダイナマイトの導火線を彷彿とさせながら火は迫る…そしてその炎が完全にガソリンタンクの元へとたどり着いたとき…立花と優梨子は同時に同じ行動をとっていた。

それは少女に追いかぶさるように身を呈した爆発から守ること…優梨子が最初に少女をかばい、その2人をかばうように立花がかばう…無情にも大量のガソリンに引火、そのタンクローリーは周囲に被害をもたらしながら大爆発を起こした…その後、少女はどうなったのか、立花と優梨子はどうなったのか…しばらくは、その「無謀ながらも勇気は持っていた」2人はその真実を知る由はなかった。

\*\*\*

…白い、とはいっても絵具や色鉛筆、クレヨンやクーピーのようなチープな白ではない。

これは存在しない白だ…周りには文字どおりに何もなく、ただただ「無」が広がっているのみ。

…もしやと思いきや、その空間にはとある男女が2人…、無論、立花と優梨子だ。

2人は先ほどこの空間に自分達がいることを認識し、なぜこのような場所にいるのかを思案していた。

そもそも自分達はあのタンクローリーに足を挟めてしまった少女を助けようと尽力し、結局自分達が身を呈しその少女をかばった…だがそれ以降の記憶については全く覚えていないし…そもそもこの空間は、自分達にある「人間的本能」が訴え続けている。

ここは人がやすやすと入る場所ではない…ここは世に「存在していない」世界である…。

なまじそういった方向の文化に関して詳しい2人は…まったく同タイミングで同じ言葉を発した。

「まさかここって…死後の世界！？私聞いてない！？」

御丁寧に約束のセリフまで言い、そこで笑いだす2人…だが死後の世界と認識して、ここまで楽天的な人間はそんなにいないであろう。

と、そんな2人に迫る人影、その人影はどこか幻想的な雰囲気纏わせながら、ふと2人に現れた。

そして2人はその顔を見た瞬間…驚愕した。

「「紅渡（くん）！？」」

「初めまして、おそらくあなたがたが知るであろう紅渡です。」

「瀬戸康治さんってことはキバかディケイドの撮影！？…なわけないか。」

「随分とお二人は理解力が有りで…。」

と、紅渡が言うが、この空間は余りにも異質だし…何より2人は自分が感じている「感覚」がないように感じられた…生きている人間



なら感じる体が「存在している」感覚、それがいくらどうしようが感じられない…そして記憶が知る限りおそらくあの後死んだであろう状況…走り出したときから覚悟はあったので、後悔はなし…それよりも2人には気にかかることがあった。

「あの！最後に私がかばったあの子は！？」

「…あの少女なら、あなた方の尽力により足を大きく負傷しながらも一命を取り留めました。いや、あなた方の行動の勇氣には感服いたしました。…しかし、同時に愚かでもあった。あなた2人の物語の終わりは、周りに悲しみを残すこととなるでしょう。」

渡の言うことはもつともである…おそらくあの子が足を挟め、その場で爆発に巻き込まれることは皮肉ながらも「運命」ということであつたのだろう。

だがその「運命」に介入者が2人入ったことにより、1人の終わりであつたはずのその事故は2人の終わりとして集結した…その分、降りかかってくる悲しみは大きい。

「…けど、いいと思うけどな。」

「…あなた方は本来死ぬべきではないところで死んでしまった。それでも、ですか？」

「それでも。人は遅かれ早かれ死ぬんだし。それに…あの時、最低でも俺は思つた…」ここで手を伸ばさなかったら絶対に後悔する”つて。ずっと後悔しながら生きるなんて俺はいやだね。」

「それは私も同じ。…そりゃ、少しぐらいは未練はあるかもしれないけど、それでも、私の信念に従つただけだから、私はこんな終わり方でも後悔しなければ万々歳！」

「…信念…とは？」

「「仮面ライダーのように…なんて言わない！人間として、正義に生きる、絶対に！」」

それは彼らがいつも合言葉としているモットー…お互いに人を守ることを信念としてきた。

そしてその思いを果たすことができた…最期の最期に、だ。

彼等にとつては一番清々しい、とも言えるかもしれない…現世に残してきた者達の悲しみは彼等もつらいところはある、だがそれ乗り越えて生きていく人間の強さも「仮面ライダー」という物語に生きていた人たちの群像劇で見えてきたのだ、決して彼等は絶望しない。

「…やはり、あなたがたがこの世界の狭間で偶然残留したのも…因果、だったんですね。…いきなりですいませんが、あなた方にはとある世界に”転生”してもらいます。」

「転生！？それは本当か！」

「ええ。…僕は世界の物語を守りし存在。あなた方という”異分子”にははその世界に紛れ込んでしまった”悪の異分子”と戦ってもらいたいと思います。」

「…なるほど、”異分子”には”異分子”ってことね。」

「その通りです。…本来ならばその異分子を叩く仕事はほかの者が受け持っているのですが、現在彼はほかの大仕事で忙しいのです。

…本来ならば一般人の助けを求めるのは心苦しいです、しかしこの次元の狭間に迷い込んだのも何かの縁、ぜひともあなた方にはその世界で新たな人生を歩み、その世界で戦ってほしい。お願いします、もちろん、あなた方がよければ、の話ですが…。」

「…もしそれを断れば、俺達はどうなるんだ？」

「そのまま生命の輪廻の一部となり、魂をリセットされてその魂はまた新しい命となる。…いわば普通の人達と同じです。」

「…よし乗った！」

「いいのですか！？」

まさかこんなに早く、それも即決してれるとは思っていなかった渡、

自分からその「戦い」に殴りこむ…勇気があるし、話の筋からおそらく「異世界」であると理解しているはず…右も左もわからない世界で生きることを容認する…これも勇気があることだ。

「その話から、おそらくほかの候補者もいると思う。だが他の人に押し付けるつても俺としては気が乗らないんだよ。…おそらくその話の筋だと、その異分子は危険なんだろう？」

「ええ。その異分子はその世界の正史を破壊し、さらにはその世界の理すべてを破壊します。」

「いいじゃん、その世界を守るヒーローつてのもさ。」

「そうよ！でも自分を過信しているわけではない。危険なのもわかる、けれど…その危険に立ち向かって、人を守ってきたヒーローの背中を私たちはずっと見てきたから、それに及ぶかは分からないけど…でも、自分で出来ることなら！」

「…感謝します。ですがその世界では危険が待っているのは必然。さらにはあなた方が住んできた世界とはまったく仕組みが違いますから。」

「どんな世界なの？」

「…ゼロの使い魔、という小説は御存じでしょうか？」

「ゼロの使い魔って…あのゼロの使い魔！？」

「まさかどこかのネット小説みたいなことになるとは…不思議だなあ、まったく。…てことは、なるほど、魔法の世界か。」

魔法…ゼロの使い魔の世界は各々が抱いているような魔法と大差はない。

火を放ち、傷を治し、突風を起こし、金属を作り出す…貴族と平民という2つの枠組みが存在し、地球で言う中世のヨーロッパの世界を再現したような世界…魔法、ともなると確かに危険は付きまとう、あそここの世界には亜人やドラゴンといったモンスターも存在するし、今の平和な日本より何百倍も危険な世界だ。

「その世界であなた方はとある貴族の双子として転生してもらいます。」

「ふ、双子！？まあ、2人同時つてのは納得できるが…。」

今まで仲が良かった親友が突然自分と地を分かち合う双子となった…なんてノスタルジーでなんて唐突でなんと奇妙な話であろう。  
…が、ド天然である上で超ポジティブスキルを持っている優梨子からしてみれば…

「何それ面白そう！」

「…言うと思った。」

まあ…立花の中では優梨子は親友というより妹みたいな存在であつたし、決して恋感情とか持ったことはなかったからまだ気まずいことではないであろう。

「…そして、あなた方にはその”救世の戦士”となるべくスキルをいくつか与えます。…ですが、その他にも御所望したものが2人にあれば…1つだけなら。」

能力付加、というのはもはやお約束であるし自分達はその異分子とやらを倒すために転生するのだから納得できる。

それにプラスとして特典も付けてくれるのだからありがたい…と2人は模索していると、ふと目が合い…そのアイコンタクトでお互いの意思を確認すると、2人は一糸間違えぬ息で同時に述べた。

「「Wドライバーとガイアメモリ！」」

「…なるほど、2人で1人、中睦まじいですね。…一応聞きますが、ロストドライバーは？」

「あ、ほしいかも。」

「…それも付けておきますね。ですがその存在自体は秘匿をお願いします。」

「まあだろうな…。」

「それが原因でドーパントなんか出てきちゃったら私も困るし。」

その暁には2人の探偵事務所が建ってしまう事態になるであろう。

「…それでは、出発の時のようですね。」

そう渡が宣言すると、2人の背後に突如銀色のオーロラが現れる。これも理解している…仮面ライダーディケイドに出てくる異世界への扉だ。

「…それでは、自分から頼んでおいて、というのなんでしょうが…どうかご無事で。」

「…ああ。」

「もっちゃん！」

ただのその会話だけを交わし2人は…揺らめくオーロラの中へと勇氣を持って足を踏み入れた。

それを見届けた渡…と、小さなオーロラ越しからとある世界の様子を確認していると…渡のポケットから、彼の相棒である蝙蝠…キバツトが姿を現した。

「渡、そんなにあいつらのことが不安か？」

「…あの方たちに必要な力は与えました。ですが…。」

「偶然見つけただけの一般人にすぎない。確かに、あのお願いを引き受けてくれのは超ラッキーだった。…お前も、実はあいつらたち

が良かったんだろう？」

「…彼らが見せてくれた勇氣、僕が言ったようにあれは無謀だった…けれど…」

「心を打たれた。…それでいいと思うぜ。渡はあいつらの正義の心に、その無謀ともいえる勇氣に感動した、それに、あいつらだったら全力で頑張ってくれると俺は思う！」

「…そうだねキバット。最低でも自分の身を守る力は託したから…苦戦してるようだね、行くよキバット！」

「よっしゃ！キバって行くぜ！…ガブツ！」

彼もまた正義を愛する仮面ライダー…人の中にある「音楽」を守りたいと願い、守りとおした戦士…仮面ライダーキバ。

そして…正義の系譜は…。

「おめでとうございます奥様！男女の元気な双子ですよ！」

とある貴族の家に響いた…元気な産声から、物語は始まる。  
舞台はハルケギニア…魔法の世界の物語の始まり。

## ブレイ家の双子

ブレイ家：「ルクセン・アル・スパー・ド・ブレイ」の代から続く比較的新興貴族であり、領地も：広大である、とはいえない大きさ、いわばあまり力のない貴族の部類に入るが、農耕に至っては順調であり納税の面に関しても安定している、借金もなし：平穩である、というのがこのブレイ家であろうか。

貴族の中には領地の管理、村民の管理を厳かにするものも見受けられるが、このブレイ家：少なくとも、現在の代である「ヤン・ソンボルト・ノーク・ド・ブレイ」子爵はそういった部類ではなく、むしろ領地民からの信頼はとても厚い、彼は類を見ない努力家でもあり、同時にちよつとしたカリスマも持つ一定の「実力者」である。そんなヤンの妻は「メリー・ヴラ・ド・ゲート・ブレイ」は献身的な妻：少しドジな面がありつつも周りにのほほんとした雰囲気を一瞬にして作り出すある意味カリスマ：そんな妻の存在がヤンの努力の力となる：と、同時にこの夫婦は砂糖にはちみつとチョコソースをかけたように甘い空気を作り出す、それは現在でも、そしてこれからずつと変わらないであろう。

：そんな仲睦まじい夫婦の間にもついに新しき命：次なる世代の鼓動がやってきた。

その命は：双子、その情報を聞いたときはさすがにブレイも迷ったが。

双子：もしどちらも男児であつたら、おそらく遠くない未来に後継ぎ騒ぎが起こる可能性大であるからだ、幸い自分の家系は王族ではないがそれでも貴族での後継ぎ問題は実にシビア、特に双子というものは面倒なことになる可能性は特大。

新しき命には大変申し訳ないが、ここは男児1人、女児1人、というベストな配置でいてほしい：女児2人、というのも色々と面倒で

はあるが。

こうして念願かなってやってきた出産日：ヤンが当日メリー以上にどたばたしながらも：無事、新しき命の産声は上がったのだった。嬉々迫るヤンはその愛おしき子供の顔を確認すると：1人は女兒、1人は男児：と、ヤンが願ったようなベストカップルでその顔を現してくれた。

もちろん新しき命は大歓迎であるし、何より未来の不安の芽が1つ減ったことにヤンは狂信者ではないにしろ始祖ブリミルに感謝した日である。

4年後、正確には4年と半年が過ぎた頃合：今年の農耕の調子を書類と見聞で確認するヤンの書斎室に不意とノックが響く。

ドアの比較的下側から響くノック：となると心当たりは2人しかいなかった。

「入っていいぞ。」

「しつれいします、おとうさま。」

「おじゃまいたします、おとうさま。」

ほかでもない愛おしき息子、その子独特の黒髪と金の瞳を持つ「ブレイブ・ノクト・トー・ド・ブレイ」と愛おしき娘、メリー譲りのきれいな緑の髪と銀の瞳を持つ「リリウム・フリー・ド・ブレイ」である。

：ヤンいわく「この子の将来が楽しみ」と言われている、ヤンいわく「才がある努力家」である自慢の娘息子。

どちらも1歳半からしゃべり始め、わずか半月でしゃべりをマスター、さらには3歳を過ぎた頃には魔法関係の書物を主に興味を持ち始め、さらにはヤンの愛読書である領地管理学の本も滅入るように



読み始めた、驚くべきはその内容を幼少の子供とは思えないスピードでマスターしたこと。

赤ん坊のころからどこか異質な、こう、落ち着き過ぎている雰囲気を持つていることは「各々の性格」と理解できた、だがどちらもうして4歳とは思えないほどの学習能力と、何より態度だ。

わがままも言わず、だだをこねることもなく、時にはヤンの領地偵察に自分から同行すると…こうなると、ヤンにはあと半年ほどである「杖契約」つまりメイジとしてのデビューが楽しみでしょうがない、おかげで大量の魔法関係の本を買ってきってしまったほど…親バカである、だからこそこう「子供ばくない」「子供たちにどこかさびしさすら感じているのだが…」。

「ほんじつはりょうちていさつをどうこうさせていただくべくまいりました。」

「わたしはあたらしいほんをかりにまいりました。」

「子供達よ…確かに少し前に”父として敬うように”とはいったが…こう、なんというか、他人行儀？な言葉使いもやめてくれないか？なんか…お父さん、拗ねちゃうぞ？」

親バカである…本当はコミュニケーション能力も大事な貴族にとって重要な「順能力」に長けているためほめるべきところなのだが…だが、気持ちも少しだけわからなくもない。

「りようかいました。それではこういうかんじでよろしいでしょうか？」

「…それ、変わったのかい？」

…まあ、こういったリリウムの超マイペースな部分に癒されることもあり、ヤンの心は荒れているわけではない。

むしろ、このマイペースでのほんとしている雰囲気は妻の影を感じ

じまたおそらく本を読んでいるであろうメリーのことを愛おしく感じるわけだが…。

メリーは現在病を患っており、絶賛療養中のみである…水のメイジの見立てでは、後１年弱は魔法と薬による治療によって感知するらしいが、それでも妻が大好きでしようがないヤンは不安で不安でしようがないのだ。

だが、それが理由で領地管理を厳かにした…ということになれば笑えない、今は元気がない妻のためにもヤンは一層と奮迅するのであった。

「…しかし、そうか、もうそんな時間か。」

「おとうさまはさくやからごむりをしているようすだそうで。エイからきました。」

「…無理、か。まあ、徹夜はしていたが…。」

「それならほんじつはおやすみになっては。ほんじつはリリウムとおべんきょうをしていますので。」

「…ブレイブのいうことも一理あるか…すまん、それでは今日の視察は中止とする。ただし、この前みたいに熱中し過ぎるなよ？」

「…こころえました、おとうさま。」

そう言葉を残し愛おしき子供達は自分達の部屋に帰還した。

…だが最後のまるでメイドみたいな返事はヤンの心にはどうしてもひっかかった…いや、父を尊敬していることはわかるのだが…。

「…私はそんなに信用がないのだろうか？それとも…パパとの時間が少なかつたせいで見切られた！？パパンシヨーク！？」

…過敏すぎるのも問題である。

\*\*\*

ここはブレイ家の一角にある子供部屋…とはいっても通常の子供部屋よりはサイズが広い。

それもそうだ、ブレイ家の子供は双子、2人ということは自然と部屋も広くなる…とはいっても、どうみても2人部屋にしても広いのが現状…さすが生粋の親バカ夫婦である。

さらに目を見張るは部屋の一角にある本棚の特大な大きさとそれに見合う本の多さである…一応歳相応の子供の玩具はそんざいするがそれもかなり、いやほとんどない。

ここにいる2人の子供は…転生者、ブレイブは生前は佐久弥立花で、リリウムは及川優梨子、生前の精神年齢を加算すれば彼らの精神年齢は29歳…とはるかに上をいつている、なので5歳児が興味を持つ玩具に興味を持つ歳でもないし、さらにいうならここは異世界、それも彼らの時代で言う「中世のヨーロッパ」に近い世界…玩具もどうも古臭いものばかり。

消去法で彼らの暇つぶしといえば…前の世界ではなかったような本、しいて言えば魔法関係の書物や貴族における領地管理関係の書物などぐらいしかなかったのである…おかげでたいていの呪文のスペルは頭に入ってしまったているが。

…今日は専属メイドであるエイも故郷であるタルブへと里帰りし、代役のメイドも厄介途中、現在この部屋およびこの部屋の周囲はこの2人だけである。

…だが念には念のため、リリウムはベッドの奥の奥、さらには簡単な仕掛けを施した小物箱から自分の手せいである簡易的な杖を取り出し「サイレント」…周囲に音を通じさせないコモンマジックを唱え完全防備となった。

これは彼女の能力の一端「魔道具の作成スキル」から作ったもので、リリウムいわく「本を読んだら簡単にできた」だそうだ。

とはいっても簡易的なもの…契約を介さないいわば「量産品」なのでせいぜいコモンマジックぐらいでしか精巧に発動できないが。

しかしなぜ魔法まで唱えてまわりに警戒するか…これからの2人の話は「転生者」としての話となるからだ。

「…で、どうするの？物語に介入する？」

物語に介入…つまりはこの「ゼロの使い魔」という世界でこれから起こるであろう出来事に介入するか…ということ、ライトノベル「物語」としてこの世界を把握している転生者だからこそできる荒業である。

だがこの世界はおそらく「正史」…つまり物語の本筋は通らないと推測できる…なぜなら転生させた渡入っていたからだ…「物語を破壊する存在がいる」と…。

「…そうだな、この歳になればある程度行動の余地は増えるし…とにかく、今は力を蓄えよう。」

力…それは貴族、メイジであるが故の特権…「魔法」だ。

確かに大きな力…「Wドライバー＆ロストドライバー＆ガイアメモリ」は所有している（いつのまに化おもちゃ箱に混入していた）、だがあの力是一般のメイジに使うには大きすぎる力であるし、おそらく「異端」扱いされるか「戦争の兵器」として利用されるか…悲しいが、どちらにせよマイナスなことしか思いつかない。

「…ところで、例のモノの構想はまとまってるか？」

「今のところは順調！でも材料は大丈夫なの？」

「そこはエイに無理を言っただけでござる。でもどうやって父さんに納得させるか迷ってる。」

「なら市場で買うことにして、そこで偶然見つけた変わり物…でいいんじゃない？」

「…ふむ、そうか、エイの知り合いに商人の伝手がいたはず。ありがとうりりウム、そうするよ！」

「えへへー。」

ブレイブがリリウムの頭を撫でる…転生前の彼らを知っているものにとつては「お前ら付き合えよ」とよく言われた光景であるがやはりどう風向きが向いても彼らに「恋愛感情」はない…、なぜかないそれに双子で恋人は…色々とアウトである。

\*\*\*

…夕食前のブレイ家にはここ最近とある慣習がある。  
それは…

「おかあさま、ほんじつのゆうしよくをもってまいりました。」

「今日もありがとうね、リリウム。」

ブレイブとリリウムが交代制で寝室で寝たきりの母…メリーに夕食を持つてくることである。

先述のとおり彼らの母であるメリーは現在患っている身であり、おそらく命に危険がないにしろ病持ち…本来ならここはメイドの仕事であろうが、これは彼女メリー自身の所望でもあった。

「せめて子供の顔は毎日見たい」という母親の切なる願いである…その願いは子供たちにも通じ、夕食前以外も…特に基本家の中で過ごすリリウムは顔を見せに事あるごとにやつてくるのだ。

「でもリリウムとブレイブももうすぐ5歳ですか。時がたつのは早いですねえ。」

「えへへ。大きくなつたでしょ?」

優しくなでるメリーにリリウムは一気に精神年齢が減少するのだ。これは彼女の境遇の関係がある…生前、及川優梨子は母親を病気で

失っており、小さいころの出来事であつたため彼女は「母親のぬくもり」を知らずに生きてきた。

しかし自分はこれで2回目の人生…目の前には2人目の母であり実質初めて触れあつた「実の母」でもある…そんな彼女の手のぬくもりが、リリウム…及川優梨子という魂を、まさに5歳児の如く戻してしまふ…しかしそのぬくもりは優しい、自分の肌でそのぬくもりを感じて入ることに幸せを感じるのであつた。

「5歳…となるとあなた方は杖契約…ついにメイジデビューなのですね。リリウムはどの属性になりたい？」

属性…土、水、風、火、そして幻の属性として虚無…虚無は例外として除き可能性がある4つの属性…主に魔法の属性は親の遺伝が多分に影響してくるので、大体は察することができるのだが。

ちなみにヤンは風のトライアングル、メリーは土のトライアングルである。

「わたしはみずのぞくせいがいいです！」

「おや？どちらでもないのですね？」

「はい！しょもつでしらべましたが、みずのすくうえあになればたいていのびょうきのちりようはかのうだそうなので、はやくみずのぞくせいをきわめておかあさまをらくにしてあげたいのです！だつておかあさま、ときどきすぐくくるしそうなんだもの。」

「…リリウム。」

娘の愛はメリーの心に何倍にも増幅され、同時にその許容量を超えた感情が「涙」という形で具現化する、おそらく病の身というのはかなり心の負担となるであろう、自分は迷惑をかけっぱなしで、子供たちとも遊ぶことができない…たまっていた感情でもあるのだろう。

「…では水を極めて、私だけでなく民達のことにも助けられる立派なメイジになりなさい。」

「はい、おかあさま！」

…ちなみに偶に部屋の前を通りかかったとある某親バカパパがこの話を聞きメリー以上に号泣した挙句夕食時にも涙を流し続けた  
…とか、余談でしかない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9124z/>

---

Round ZERO 【ゼロとWな転生者】 《試験投稿中》

2011年12月28日21時49分発行